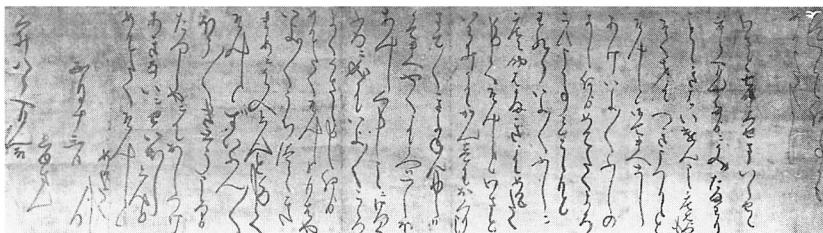


三井高利書翰



三井高利妻寿讚書翰

口絵 三井高利夫妻の書翰

上 三井高利より四男高伴宛書翰（「家君御消息」六月廿七日付）

室町三井家旧蔵、三井文庫別館所蔵史料（未公開）

本紙 縦一五・〇cm×四七・三cm軸装

推定年代 延宝四年（一六七六）高利五十五歳、高伴一八歳

下 寿讚より二男高富宛書翰（「栄昌院様消息」正月十三日付）

伊皿子家旧蔵、三井文庫所蔵写真

推定年代 元禄九年（一六九六）寿讚六二歳、高富四四歳頃
延宝元年（一六七三）八月、三井高利は、江戸に二男高富、京都に長男高平を
配置して、念願の江戸本町一丁目に呉服店進出を果たした。兄弟が未だ十九、二
十才の頃である。下の弟達も次々に江戸と京都に送り出し、高利自らは松坂の地
で総指揮を執り、仕入販売に閑し、指示を出していた。この指示というのが専ら
手紙で行なわれていたわけである。

寿讚は、仕事一筋の夫高利、子供達とその家族を支え、見守り続けてきた。そ
の手紙は、心の細やかな、やさしい人柄の滲み出た文体であつて、家族ばかりで
なく、他の人々の動き、様子をもよく伝えている。
なお詳細は、本号史料紹介「三井高利関係書翰」を参照されたい。（樋口知子）